

リス・ベルアド氏、さらに本シンポジウムの成功にご尽力いただいた方々すべてに深甚なる感謝を捧げる。

シンポジウムでの発表をもとに、その大要をここに無事刊行できたことはまことに有難く、喜ばしい。章の配列はおおむねシンポジウム当日の順に拠ったが、図版の著作権処理の問題もあり、論考の分量に多少の差が生じたことは読者にも執筆者にもご寛恕願いたい。

岡佳子教授の論考では、江戸初期の京焼のそもそもの発端から、そうした陶磁器の名品（とりわけ野々村仁清の作品）が海外に流出し、ボストン美術館をはじめとする美術館に所蔵されていること、それらの調査を通じて逆に日本における京焼銘品の特定につながる場合があることが説かれている。

マリ＝カトリーヌ・サユット氏は、まず18世紀ヨーロッパの貴顕社会で盛んになり、19世紀にいたってさらに別趣の流行を見る東洋趣味、日本趣味が絵画、版画、装飾品にうかがわれること、とりわけ、新しく発見されたワトーの版画やエッチングの資料に基づいて、詳細に最近の研究成果を明らかにされた。

エマニュエル・シュヴァルツ氏は、長い伝統を誇るパリ国立高等美術学校にはるばる日本からやってきた画学生が、どのように西洋美術と対峙したか、エコール・デ・ボザールに残る資料や当時の文学作品を通して詳述された。

極東に位置する日本の研究が、はるか離れたフランスにおいてどのように行われたか。日本研究の草分け的存在で東洋語学校最初の日本語教授を務めたレオン・ド・ロニーについては、最近新たな研究の光が投げかけられているが、クリス・ベルアド氏はロニーの語学的、文学的、文化的日本研究を、その生涯や当時の東洋学の状況などを踏まえて論じられた。

柏木加代子氏は、19世紀後半のフランスにおける日本趣味の流行に加え、日本を舞台にした演劇がパリで上演されてエキゾチズムを喚起している、そのようなブルジョワ主義的な風潮に皮肉な一矢を報いるべく、小説家ギュスターヴ・フロベールが上演を目指した戯曲にその日本への関心を感じ得ること、また、この写実主義作家の姪カロリーヌに絵画指導をしたことのあるエコール・デ・ボザールの教授で、のちの学長レオン・ボナの画業や、その弟子たちの動向をも明らかにされた。

盛田帝子氏は、トロンコワ・コレクション所蔵の絵画の中に近衛家が七夕の日に宮中へ花扇を送る伝統的行事を描いた『花扇使者図』があるのに着目、近衛家の陽明文庫に蔵されている同じテーマの絵画との比較を手始めに、この伝統行事の由来やその他同種のテーマを描いた絵画、それに添えられた文章などを紹介しつつ、それぞれの特色を論じられている。

クリストフ・マルケ氏は、トロンコワ・コレクションがエコール・デ・ボザールだけではなく、いくつかの美術館に分散、保管されていること、その膨大なコレクションを作り上げたトロンコワの実像とこのコレクションの文化史的な意義を明らかにしつつ、とくに和本のコレクションの精細な検討を通じて、その蒐集がいかに意識的なものであり、明治以降の近世文学研究者たちに先駆けて、江戸出版文化史にきわめて貴重な寄与をなすものであったかを強調されている。

以上いずれの論文も日仏文学、美術の交流の中に貴重な一石を投じるものばかりで、シンポジウムでは熱のこもった質疑応答が行われたことを付記しておく。惜しむらくは、多様で充実した7つの発表をわずか1日に詰め込んでしまったため、テーマのさらに深い掘り下げも期待できた憾みが残ったことである。本書の公刊によってその知的飢渴を多少とも癒すことができれば、編者の1人として慶賀に堪えない。ただ最初の予定では日本語表記による論

まえがき

考を掲載するはずであったが、途中フランス人読者の便を考え、また当日の発表の言語を尊重して、フランス語表記でも掲載することにしたため、時日の関係で日本語論考のみしか掲載できなかった執筆者に責任者として心からお詫びしたい。

本書の刊行にあたっては、笹川日仏文化財団に多大のご援助をいただいた。また毎回「大手前大学比較文化研究叢書」の刊行をお引き受け下さっている思文閣出版、とりわけ編集の任に当たってくださった三浦泰保さんはじめ、多くの関係の皆さまに厚くお礼申し上げる。

編者を代表して

大手前大学 交流文化研究所 所長
柏木隆雄

はじめに

柏木隆雄 i

欧米の美術館・博物館が所蔵する京焼について

——17世紀を中心に——

岡佳子 3

ロカイユ様式と東洋 マリ＝カトリーヌ・サユット（藤本武司訳） 12

——18、19世紀フランスの蒐集家たちに見る趣味のアヴァンチュール——

第1節 ワトーとその影響

第2節 中国風工芸品の商人と蒐集家

第3節 中国風工芸品ロカイユ

結 論

マラケ河岸の「スイ＝チュウ＝カ」

——パリ美術学校と明治期の日本——

エマニュエル・シュヴァルツ（小林宣之訳） 30

第1節 美術学校と日本人画家

第2節 芸術家、批評家、学識者、詩人

第3節 漂う時を求めて

第4節 舗石と磁器

フランスにおける日本学の草分けレオン・ド・ロニーについて

——ロニーの日本文化紹介をめぐって—— クリス・ベルアド 60

第1節 若きロニーの東洋学者・日本学者としての出発

第2節 ロニーの日本文化紹介の活動

第3節 日本学から遠ざかるロニー

フロベールとボザール教授ボナ

柏木加代子 86

はじめに

第1節 シャルル・グレールとフロベール

第2節 レオン・ボナとフロベール

トロンコワ・コレクションの花扇使者図について 盛田 帝子 111

はじめに

第1節 トロンコワ旧蔵「花扇使者図」

第2節 近衛家伝来品より知られる「花扇の使」の実態

第3節 田中訥言「花扇使者図」

第4節 幕府御用絵師住吉広定に描かれた『七夕花扇使図』

第5節 草葉老人画「花扇使者図」と田中訥言画「花扇使者図」

第6節 草葉老人の画賛の典拠

まとめ

エマニュエル・トロンコワの和本コレクション

——19世紀フランスにおける江戸出版文化史を構築する試み——

クリストフ・マルケ 129

第1節 忘れられた在野の日本学者エマニュエル・トロンコワ

第2節 文献で確かめられる幻のトロンコワ・コレクション

第3節 現存するトロンコワの和本コレクションの概要

結 び

Avant-propos Takao KASHIWAGI (Traduit par Chris BELOUAD) 165

Les céramiques *kyō-yaki* conservées dans les musées occidentaux :

Autour de pièces produites au XVII^e siècle

Yoshiko OKA (Traduit par Chris BELOUAD) 172

La Rocaille et l'Orient :

une aventure du goût à travers les collectionneurs français des XVIII^e
et XIX^e siècles

Marie-Catherine SAHUT 174

Sui-Tyu-Ka sur le quai Malaquais :

L'École des beaux-arts et le Japon à l'ère Meiji

Emmanuel Schwartz 192

Léon de Rosny, pionnier des études japonaises en France,
et ses activités de présentation de la littérature et de la culture
japonaise

Chris BELOUAD 215

Gustave Flaubert et Léon Bonnat, professeur de l'ENSBA :

Quelques aspects de l'impressionnisme et du japonisme de Flaubert

Kayoko Kashiwagi 243

Au sujet du *Messenger à l'Éventail fleuri*, peinture de la collection

Tronquois

Teiko MORITA (Traduit par Chris BELOUAD) 262

La collection du japonisant Emmanuel Tronquois :

une tentative de constitution d'une histoire du livre illustré japonais de
l'époque d'Edo

Christophe Marquet 263

編者紹介

石 毛 弓 (いしげ・ゆみ)

1970年京都府生。龍谷大学文学部哲学科哲学専攻修士課程修了。イギリスのダーラム大学人文学部哲学科博士課程修了。大手前大学現代社会学部准教授。専門は西洋哲学。単著に『マンガがひもとく未来と環境』(清水弘文堂、2011年)、共著に『大学における学習支援への挑戦——リメディアル教育の現状と課題——』(2012年、ナカニシヤ出版) など。

柏 木 隆 雄 (かしわぎ・たかお)

1944年三重県生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了、神戸女学院大学助教授を経て大阪大学文学部教授(仏文学講座)、放送大学大阪学習センター所長。現在大手前大学学長、交流文化研究所長。パリ第Ⅶ大学第Ⅲ期博士、日本フランス語フランス文学会会長。著書に、『*La trilogie des Célibataires d'Honoré de Balzac*, Paris, Nizet, 1983. 『イメージの狩人 評伝ジュール・ルナール』(臨川書店、1999年)、『謎とき「人間喜劇」』(ちくま学芸文庫、2000年)、*Balzac, romancier du regard*, A.G.Nizet, 2002. 『交差するまなざし——日本近代文学とフランス——』(朝日出版社、2008年) など。

小 林 宣 之 (こばやし・のぶゆき)

1953年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。大手前大学メディア・芸術学部教授。著書に、『エクリチュールの冒険——新編・フランス文学史——』(共著、大阪大学出版会、2003年)、訳書に、『ネルヴァル全集』第2巻、第4巻、第6巻(共訳、筑摩書房、1997年、1999年、2002年)、エリック＝エマニュエル・シュミット『そこにモーツァルトがいたから』(キネマ旬報社、2006年) など。

執筆者紹介 (掲載順)

柏 木 隆 雄 (かしわぎ・たかお)

編者紹介参照。

岡 佳 子 (おか・よしこ)

1954年福岡県生。京都女子大学大学院文学研究科修士課程修了。京都市社会教育振興財団職員、京都市歴史資料館嘱託を経て、現在大手前大学総合文化学部教授。博士(芸術学 筑波大学)。専攻日本文化史・陶磁史。主要著書『寛永文化のネットワーク——隔冀記の世界——』(共編著、思文閣出版、1998年)、『国宝 仁清の謎』(角川書店、2001年)、『窯別ガイド 日本のやきもの 京都』(淡交社、2003年)、『近世京焼の研究』(思文閣出版、2011年)。

Marie-Catherine SAHUT (マリ＝カトリーヌ・サユット)

パリ・ソルボンヌ大学美術史専攻修了、1976年からルーブル美術館学芸員。在ローマ、フランス・アカデミー研究員(1979-1980)、ルーブル美術館主任学芸員(18世

紀フランス絵画、古代部門コレクション担当)。主要著書に、「王の首席画家カルル・ヴァンロー（1705-1765）」『解題付き作品図録』（於、ニース、クレルモン・フェラン、ナンシー、1977）、「ユベール・ロベールのルーブル宮、絵画部門資料第18」『展示・ファイル図録』（RMN, 1979）、「ディドロとブシェからダヴィドの芸術、1759年から1781年のサロン」『展覧会図論』（於、造幣局1984-1985、RMN, 1984）、「ワトーと雅宴画、18世紀前半のフランス絵画についての技法研究」『専門誌・テクネ』（2009-2010）、「アントワヌ・ワトーと版画芸術」『展覧会図録』（RMN, 2010）。

Emmanuel Schwartz（エマニュエル・シュヴァルツ）

1952年生。古典文学教員資格取得。パリ国立高等美術学校主任学芸員。文学と美術との関係に関する論文多数。著書に『アカデミーから美術学校へ 歴史的、文学的アンソロジー』（2001年）、『パリ国立高等美術学校の彫刻作品集』（2002年）、『マルゴ王妃からシャルリュス男爵までのマラケ河岸』（2008年）。またフランス、合衆国での各種展覧会の企画、構成を行っている。『神々と人間。ホーマーの遺産』（2004-2005年、パリ、プリンストン、ニューヨーク）、『自由派、パリで芸術家たること、1648-1817』（2014年）など。

Chris BELOUAD（クリス・ベルアド）

1982年フランス・マルセイユ生。フランス国立エクス＝マルセイユ第1大学大学院文学研究科を修了後、2006年に日本政府の国費外国人留学生として来日。大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了。大阪大学博士（日本語・日本文化）。専門は比較文化論、日欧交流史。関西学院大学、神戸女学院大学非常勤講師を経て、現在岡山大学大学院社会文化科学研究科講師。共著に、*Léon de Rosny, de l'Orient à l'Amérique*（Presses Universitaires du Septentrion, 2014年秋刊行予定）。

柏木加代子（かしわぎ・かよこ）

1947年大阪府生。1979年大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ・ソルボンヌ大学第Ⅲ期文学博士。パリ第8大学文学博士。大阪大学博士（文学）。京都市立芸術大学名誉教授。単著に *La Théâtralité dans les deux Education sentimentale*（France Tosho, 1985年）、『かきつばた 土田麦僊の愛と芸術』（大阪大学出版会、2003年）。単著に『フランス・ロマン主義と現代』（筑摩書房、1991年）、『象徴主義の光と影』（ミネルヴァ書房、1997年）、*Flaubert: Tentation d'une écriture*（Université de Tokyo, 2001年）、『日仏交感の近代』（京都大学学術出版会、2006年）、*Madame Bovary et les savoirs*（Presses Sorbonne Nouvelle, 2009年）など。

盛田 帝子（もりた・ていこ）

1968年宮崎県生。九州大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。専門は日本近世文学、和歌文学。日本学術振興会特別研究員（PD）を経て、現在大手前大学准教授。単著に『近世雅文壇の研究——光格天皇と賀茂季鷹を中心に——』（汲古書院、2013年）、共著に『蘆庵文庫目録と資料』（青裳堂書店、2009年）

などがある。第29回日本古典文学会賞、第6回ゲスナー賞（銀賞）受賞。

Christophe Marquet（クリストフ・マルケ）

1965年生。フランス国立東洋言語文化研究院（イナルコ）教授。現在、日仏会館（東京・恵比寿）フランス事務所所長を兼任。研究分野は日本近世・近代美術史と出版文化史。編著に『絵を読む、文字を見る——日本文学とその媒体——』（『アジア遊学』2008年）、『日本の文字文化を探る——日仏の視点から——』（勉誠出版、2010年）など。パリ国立図書館をはじめフランス各地の図書館や美術館で和本コレクションを調査し、歌麿『画本虫撰』、『絵本青楼／年中行事』、歙形蕙斎『人物略画式』、中村芳中『光琳画譜』、北斎『諸職絵本／新鄙形』、河鍋曉斎『曉斎百鬼画談』など、江戸・明治期の絵本を数多くフランス語に翻訳して復刻出版。

翻訳者紹介

藤 本 武 司（ふじもと・たけし）

1961年大阪府生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。大阪大学修士（文学）。現在大阪大学ほか非常勤講師。フランス古典主義演劇研究。著書に、『エクリチュールの冒険——新編・フランス文学史——』（共著、大阪大学出版会、2003年）など。

小 林 宣 之（こばやし・のぶゆき）

編者紹介参照。

Chris BELOUAD（クリス・ベルアド）

執筆者紹介参照。

大手前大学比較文化研究叢書10

日仏文学・美術の交流

——「トロンコワ・コレクション」とその周辺——

Les Échange culturels entre le Japon et la France :
Autour de la collection japonaise d'Emmanuel Tronquois

2014年 3 月31日 発行

定価：本体2,800円（税別）

編 者	石 毛 弓 柏 木 隆 雄 小 林 宣 之
発行者	田 中 大
発行所	株式会社 思 文 閣 出 版 京都市東山区元町 355 電話 075-751-1781（代表）

印 刷 製 本	亜細亜印刷株式会社
------------	-----------

©Printed in Japan ISBN978-4-7842-1745-8 C3090